半人

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
半人

【Ｎコード】
Ｎ４４６９Ｔ

【作者名】
ウル

【あらすじ】
高木賢一郎が意識を取り戻すと、そこは一面の雪に覆われた冬の森、異世界だった。死を覚悟する賢一郎。彼を救ったのは、山羊の耳と角、そして下半身をもっとケンタウロスの少女――クー。彼女の祖母も加わり、そこから始まる奇妙で穏やかな共同生活。しかしそれは、この世界すべてを巻き込んだ大きな運命の、ほんの序章にすぎなかったのだ――。転載作品。

1

冷えた頬をそっとなぞりながら、高木賢一郎は立ち尽くしていた。ダメージ加工のジーパンと七分袖のTシャツ。足元にはスポーツメーカーのサンダルをつっかけ、手には屋台で取った水風船をぶら下げた出立ちは、この場所には少々ならずそぐわない。

それもそのはずである。彼は数瞬前まで、七月の茹だるような暑さの中、人山の中に紛れ夏祭りを楽しんでいたはずなのだから。

しかしそれならば、この疎外感と寒さはなんだろうか。ここはいったいどこだというのか。

混乱する彼の目の前に広がっているのは、茫漠とした冬の森だった。ひたすらに白、白、白。くるぶしまで雪に埋める一面の銀世界は、先ほどまでの賑やかな色彩が嘘みたいに静まり返っている。晴れ上がっていたはずの空は曇天に変わり、かろうじてグレースケール以外の色を添える木々の肌色も、むしろこの森の清閑さを強調してしまっているように見えた。

耳をすましても、かろうじて聞こえるのははるか遠くの枝から雪が滑る音。かしましい祭りの喧騒もここには無縁で、世界中で呼吸をしているのは自分ひとりではないかとすら思える。

賢一郎はかがんで、足元に落ちていた眼鏡を拾った。耳にかけると景色が急に歪み、狼狽する。

「目、見える？」

何度か眼鏡をかけて外してをくり返してみて、どうやら眼鏡をかけなくても平気なようだと確信した。考えてみれば極度の近眼である彼が、眼鏡もかけずに周囲の景色を見てとることができたというのがおかしいのだ。妙なところでリアルなんだかそうじゃないんだか。釈然としない気分で眼鏡をポケットに押し込み、賢一郎は冬の森を歩き出した。

どれほど時間が経ったろうか。ふいに強い焦燥と不安が押し寄せてきて、賢一郎は立ち止まった。足元を見れば、サンダルからむき出しの皮膚は真っ赤になっており、このままだと凍傷は免れないだろうと思われる。

あてもなく歩き続ける間ずっと、賢一郎は、これはきっと夢なのだと考えていた。祭りで遊び疲れて家に帰り、そのままベッドに倒れこんで寝入ってしまったのだろうと。ただ夢の中では、その部分を憶えていないから、こんな不思議に思ってしまうのだと。

しかし今、その考えも手のひらの上で危うく崩れかけていた。

手にすくった雪の冷たさは明らかに本物で、触れた幹のざらざらとした手触りは、夢にしてはあまりに精巧すぎた。こんなにも脈絡があって意識のはっきりした夢を、俺は今まで見たことがあるだろうか。

賢一郎は右手にぶら下げた青い水風船を鳴らす。ぱつん、ぱつん、とゴムの中で水が暴れた。思い出せる最後の記憶は、友人たちと一緒にこれを取ったときのことだ。高校生にもなってとか笑っといて、最後にはみんなエキサイトして、獲れなかったやつはみんなから馬鹿にされていた、そんな他愛もない記憶だ。

しかし、フランクフルトやら綿あめやらのカラフルな匂いと人ごみのうねるようなざわめきからその後を思い出そうとすると、彼の前には霧が立ち込めてしまう。記憶が欠落しているというよりは、さながら上書きを重ねたビデオテープのように、強引に書き換えられているといったほうが正しい。

いったい何があったというのだろうか。うっすらと強い光を感じたような気がするが、それすらもうどこか手の届かないところに行ってしまったようだ。

「もう……夜か」

木の根元に腰かけながら賢一郎はつぶやく。気休めながらも、できるだけ体温を逃がさないようにしようと思い、膝を抱いて体育座りになった。曇り空の向こうで太陽は着実に傾いており、辺りはだ

んだんと暗くなっている。
寒さのせいで鼻はぐずぐずと濡れ、ワックスで立てた髪は半ば凍っている。ジーンズの裾は雪でダマになっており、むき出しのまま冷気にさらしていた手足には感覚もない。頭もぼんやりとしてきており、体にはもはや震える力も残っていないようだった。
これだけ深い冬の森である。夜になれば今よりももっと冷え込むのは間違いがなく、まだ日の沈まない今がこの状態だとしたら、どんなに楽観的に考えても、明日まで生きていられる見込みはゼロに近い。もちろん、次の日だってある。次の日も。
死ぬのだ、こんなわけのわからないところで、死ぬのだ。
そう結論づけると、一気に得体の知れない脱力感のようなものが襲ってきて、賢一郎は思わず笑いをこぼした。寒さに強張った頬は上手く笑みの形を作れず、それがおかしくてさらに笑った。
賢一郎は認め、あるいは屈したのだ。この、”現実”に。

せめて明かりくらいあればいいんだけど。いよいよ闇に包まれようとする森に向かって賢一郎は自嘲するように思い、はたと気づく。
頭を振ってなんとか意識をはっきりさせる。かじかむ手でポケットを探り、賢一郎は携帯を取り出した。こんなに大事なことをどうして早く思い出さなかったのだろうか。森の中ではおそらく圏外だが、万が一ということがないわけではない。それに明かりがあるだけで気の持ちようも違うし、誰かに見つけてもらう目印にもなる。
しかし、藁をも掴む思いで開いたディスプレイはいつまでたっても黒いままで、点灯さえしてくれなかった。最悪の予感にぎこちなく眉をしかめながら賢一郎は電源ボタンを押した。反応はない。いら立ちながら背面の電池パックを開いてバッテリーを抜き、もう一度入れなおしてから再び電源ボタンを押す――応答は、なし。
賢一郎は感覚のない手で何度か同じことをくり返したが、電池切れなのか寒さに壊れてしまったのか、手の中の小さな機械がもう一度動き出す様子はなかった。

たったこれだけのことですっかり消耗しきってしまい、賢一郎は自分の意識が少しずつ薄れかけてゆくのを自覚した。放り投げた携帯は、ずさりと雪に埋もれる。強張った腕では一メートル先にも投げられない。万事休すだ。

「くそっ」

毒づいた台詞すら、死にかけの小鳥のような弱々しい声で。

「ひゃあっ」

だが、その声はたしかに何者かに届いていたようだった。短い悲鳴と尻もちをついたような音が右手のほうからして、賢一郎はかすむ目をこらしてそちらを見た。灯りを手にした影が近づいてくる。

死に体の人間に腰を上げる力が残っているはずもなく、喉からは「たすけてくれ……」と消え入るような声がしぼり出されただけだ。それでも声の主はこちらに気づいたらしく、雪を踏んで走ってくる音が聞こえた。

助かった！

「大丈夫ですか」

ランプの強い光が賢一郎の上に投げかけられた。声から判断するに彼と同い年くらいの、どうやら女の子らしい。視界がかすんできている上、暗闇に慣れ始めた目にはランプの光はまぶしすぎ、顔はよく判別できない。

賢一郎が目を細めたとき、

「ふ、二つ足……。人間……ですか？」

少女は驚いた声で賢一郎の顔をのぞきこんできた。今まで掲げていたランプが地面に置かれたお陰で、賢一郎にはぼんやりとだが彼女の顔を見ることができた。

柔らかそうな白い肌の中、頬だけは寒さのためか遠くから駆け寄ってきたせいか、ほんのりと上気している。眉はハの字を描き、明るく活発な印象を与える黒い瞳は、今は好奇心と心配の混ざった色で彼のことを見つめている。

ここが夏祭りの喧騒の中で、彼女の特徴がそれだけだったならば、

賢一郎も少女の可愛らしさに目を奪われていたにちがいない。この厳冬の森でランプを手に駆け寄ってきた可憐な少女を、天使と見まごうこともあったかもしれない。

しかし、その小麦色の髪の合間からひょっこりと顔を出しているのは、白い、山羊の耳と角だったのだ。

「あ、だ、だいじょうぶですかっ」

彼の前にひざまずいた彼女の下半身は、雪のような純白の毛に覆われていた。

四本の、すらりと伸びた山羊の足。

やっぱりこれは夢だったのだ。賢一郎は安堵の心地に満たされながら、意識の手綱をそっと手放し、深い眠りに落ちていった。

いやちがう。これでようやく、目覚めることができるのだ――

賢一郎が目を覚ましたとき、最初に感じたのは匂いだった。牛乳と香辛料、そして野菜が煮える良い匂いだ。食欲をそそるこれは……シチュー、だろうか。

「起きたかい」

次に刺激されたのは聴覚だった。賢一郎はまぶたを開け、どうやらここが家の中で、自分が硬いベッドのようなところに寝かされていることを知る。体を起こそうとしたが節々が痛く気だるいため、なかなかままならない。首をめぐらし先ほどの声の主を探すと、扉の脇に立っている老婆に気づいた。

「はい、起きました」

「そりゃあよかった。おめえさん、森の中で気絶しておったんよ」

老婆は手に木の盆を持っており、その上に載せられた鍋と木皿の中ではシチューがおいしそうな湯気を立てている。「わしはアサよ」

「高木賢一郎です。あの……ありがとうございます」

「構わんかまわん、大したことじゃねえ」

アサと名乗った老婆は謙遜の言葉とは裏腹になぜか意外そうな表情を浮かべていた。それを問おうとした賢一郎を遮って、ぐう、と

腹が鳴った。
「はっは。ひとまずは腹ごしらえってところだねえ」
老婆が笑うので、ええだとか、ああだとか、賢一郎は曖昧な受け答えをした。重大なことを忘れているような気がしたが、頭がぼんやりしていてうまく考えごとができなかった。
何より目の前に差し出されたシチューの魅力には抗いがたいものがある。だるい体をなんとか起こして硬いベッドに腰かけ、賢一郎はアサの手から木皿を受け取る。
「いただきます」
それだけをかろうじて言って、賢一郎はシチューに口をつけた。
空腹というスパイスを抜きにして考えてもめちゃくちゃに旨いシチューだった。野菜は新鮮で甘く、スープには胡椒が効いている。賢一郎は最初の一杯を一気に飲み干し、二杯目のシチューは老婆から渡されたナンに浸して食べた。野菜を巻いたナンは普通のものよりもちもちとした食感で、酸味の少ない甘くて香ばしい味は、シチューにとても合う。
「ごちそうさまでした」
木のスプーンを置いて手を合わせた賢一郎に、アサはまたあの意外そうな表情を浮かべた。彼が不思議に思っている内に、彼女は受け取った食器を盆に載せて部屋を出て行ってしまう。
手持ち無沙汰となった賢一郎は部屋の中に視線を向ける。どうやらここはログハウスらしい。八畳くらいの床には何かの毛皮らしい毛足の長い茶色の絨毯が敷かれ、正面にあるレンガ造りの暖炉では薪が赤々と燃えている。家具は少なく、賢一郎の座っているベッドを除けば衣装箪笥と小さな机がひとつづつあるのみだ。
部屋を眺めていると、ふいに記憶がよみがえってきた。祭りの喧騒と冬の森の寒さ、差しかけられたランプの光、かすむ目に映った少女の姿が。
暖炉の赤い火を見ながらなのに、賢一郎は全身に鳥肌が広がってゆくのがわかった。これはもうどう考えたって夢なんかではない—

―信じがたくとも、立体的ではっきりとした現実だ。
ここはおそらく――
「うわあっ」
扉が盛大に開き、女の子が部屋へと転がり込んできた。どうやら開ける直前につまづいたものらしい。
「すまんな。ほんとはおまえさんを助けたのは孫でなあ」
少女の背後に立ったアサが苦笑しながら言った。
わかっていますよ、と賢一郎は心中でつぶやいた。当然のことながら、目の前にへたり込んでいるのは、賢一郎を森で助けてくれたのと同じ少女だ。小麦色のウェーブがかった髪も、その下のやわらかな、しかし整った造作も、丸く大きな瞳の夜にも似た色も。わずかばかり異なるのは、真っ赤に染まったその表情だけだろう。
だから、髪のあいだから突き出た山羊の角、温かそうな毛に覆われた純白の下半身――そして四本ある足についたひづめもまた、寸分違わずに同じなのだ。
「ま、また、会いましたね……」
「えと、……こんにちは」
こんにちはケンタウロスのお嬢さん。さようなら、俺と、俺の世界。

2

賢一郎の前では今、アサとこちらはクーと名乗った少女が食事をしている。椅子と同じく丸太を切って作ったテーブルに並べられているのは、賢一郎が先ほど食べたココークというらしいシチューや、野菜を巻いたナン、見たことのない木の実やキノコを使った料理だ。

しかし、何より目を引くのはその食卓につく小麦色の髪の少女だろう。器用に床に座り木のスプーンを使う少女の髪のあいだからは、カールした白い角と獣の耳が覗き、そして衣服を纏わないその下半身はまぎれもない純白の山羊のものだ――彼女は、半人半山羊のケンタウロスだった。

もちろん、少女の体がよくできた作り物だという可能性も否定はできない。山羊の下半身と少女の上半身の”継ぎ目”は、少女が着ている不思議な模様の服で上手に隠されているし、近寄って見たわけでもない。もしかしたら、あの毛は触るとゴワゴワした合成繊維で、その下は樹脂か何かで作られているのかもしれない。

けれど理性はそれを否定する。仮に二人が嘘をついているのだとして、どうしてそこまでして彼女たちが自分を騙そうとするのか、真っ当な理由が思いつかないのだ。そんなことをしたって、なんの得もない。

近くの窓ガラスを覗くと、深い森の梢が月光に白く浮かぶ、寒々とした風景が見え、ここが森のど真ん中であるらしいことを伝える。ログハウスのような家を見回すと、日焼けした簡素な調度がいくつかと、赤々と火を燃やす炭色の暖炉が目につく。天井を走る太い梁からは燻製にされた腸詰や見慣れない魚の干物がぶら下がり、床には何かの毛皮でできた絨毯が敷かれている。

この居間だけではない。どうやらアサの寝室らしい賢一郎が寝かされていた部屋も、そこからここまで通ってきた長い廊下も、どれも恐ろしいほど『リアル』だった。

それはなぜなのか。そう問うたときに、彼が出せた答えはひとつだった。
賢一郎にとって、自分が『異世界』に来てしまったのだということに、もはや疑問をさし挟む余地はなかった。
「すこしは落ち着いたか？」
「ええ。なんとか」
声をかけられ、賢一郎は嘘をついた。正直に言えば、一生をかけたとしたって落ち着くことなんてできない気がしている。ぎこちない笑みを返す彼をどう解釈したか、アサは食器を手に立ち上がろうとする孫娘を呼びとめた。
ケンタウロスの少女は、初対面のときの豪胆さはどこへやら、なぜかおどおどした様子でこちらにやってくる。
「クー。ケンイチロウにちっと家を案内してやれ」
「いや、それは」
「アサ……」
「遠慮するこたねえ。どうせ冬の間は山からは下りれなんだ。しばらくの間住むとなりゃ、なんぼか勝手を知っとったほうがいい」アサは老人とは思えない強引さで二人を捕まえると、底冷えのする廊下へと押し出す。「それに、若い者同士、挨拶は早めにしとったほうがな」
なんなんだこの婆さんのノリは。あっけにとられる若者たちにウインクでもしかねない笑顔を投げてから、アサは扉を閉めた。
「いっつもあんな感じ？」
「……はい」
電灯などない長い廊下には、クーの持つランプの明かりだけに照らされて、困惑のまま二人。
「ど、どこから行きましょうね？」
「とりあえずそれ、置いてこなきゃね」
あたふた取り乱すクーから同じくあたふたとランプを受け取ると、

賢一郎は彼女が腕に抱えたものを指す。片付けの途中だったのか、木の盆には食卓に並べられていた食器の半分も乗せられていない。
「半分、持とうか？」
「大丈夫です大丈夫です。ひとりで持てます」
賢一郎はほとんど勇気をふり絞る気持ちで手を差し出したのだが、ケンタウロスの少女は首をぶるぶる振って断ってくる。おびえられているのだろうか。それならばよほどこちらのほうがおびえている。賢一郎は内心アサを恨みながら、逃げるように歩き出したクーに続いた。冷気に満ちた板張りの廊下にはひづめの音がこつこつと響く。
賢一郎とクーは、互いに絶妙な距離を保ちながら、終始無言のまま台所までたどりついた。
「ここが台所です」
消え入るような声で言うクーに、賢一郎は「なるほど」と寝ぼけた相槌をうつしかなかった。なにがなるほどなんだっての。
クーが壁のランプを灯すにつれて見えてきた部屋の大きさは、賢一郎の基準で言えば「台所」ではなく「給食室」のレベルだった。冬場の食糧貯蔵庫も兼ねているのだろう、二十畳はあろうかというスペースの片手には、乾燥させた食べ物の束や、穀物の入っているらしい麻袋、その他大きな甕や壷が置かれ、天井からは干物や燻製が無数に吊り下がっている。肉も野菜も、賢一郎が目にしたことのない類のものだ。住人二人にしては多すぎる気もする備蓄の山の隅には、外に続くのであろう扉も見える。
もう一方は調理場らしく、まるで魔女の鍋のような大きな鉄鍋や、料理の跡が残る木製のテーブルがあり、壁には調理器具らしいものがかけられている。火は消えていたが鍋の中にはどうやらココークが入っているらしい。
「目、ほんとに良くなってんな」
洗い場に食器を置く後ろ姿を眺めながら賢一郎がつぶやくと、「へえっ？」と小さく悲鳴を上げてクーが振り向いた。
「ああ。いや、ひとりごと。ごめん」

「そ、それはよかったです」
噛み合わない会話に妙なおかしみが込み上げてくるのを感じて、賢一郎は思わず言葉を返していた。
「敬語、使わなくていいよ」
「え？」
「だから、その『です』とか『ます』とか、そういうの。いらない」
「でも……それは」
クーは賢一郎と目を合わせようとしなかった。おびえた草食動物――半身は本当にそうだけれど――のように目をそらし、今すぐこの場を逃げ出したいみたいに見える。
その姿をむしょうに寂しく思う自分がいて、賢一郎は驚く。
「変だな」
「な、何がですか」
「ごめん、なんでもない」
賢一郎の言葉は、どんなものであっても目の前の少女をおびえさせてしまうらしい。だが、おびえながらも律儀に返事をしてくる少女がどことなく可笑しく、不快な気分ではない。慌てふためくクーを見るにつれ、賢一郎は自分がだんだんと落ち着いてくるような気がした。「あのさ」と言うと「はい」と返ってくる。
「えっとさ……もしかして俺、怖い？」
「ちがいます」
弱々しいながらもきっぱりとした否定は、嘘を言っているようには聞こえなかった。
「じゃあ」そう言いながら、賢一郎は自分がいつの間にかクーの目の前まで歩いてきていたことに気づく。そりゃあ、おびえるのも仕方がないか。「やっぱり敬語はやめてよ。俺のことは賢一郎でいいから。俺も君のことクーって呼ぶし」
クーは床を凝視しながら、こくりと頷いた。それが一刻も早くこの場から立ち去らんがための頷きに見えて、賢一郎は落胆を覚える。
「ごめん。怖がらせるつもりじゃなかったんだけど……」

言葉は途切れて宙をさ迷う。なにかひどい失敗をしでかしたみたいな居たたまれなさが、賢一郎にもう一度口を開かせる。
「友だちになろうよ」
その台詞に、クーははじめて顔を上げた。きょとんとした顔でこちらを眺めてくる少女の姿に、賢一郎はそこでようやく自分が口にした言葉のすさまじい恥ずかしさに気づいた。暖房もなく寒いはずの部屋で、じわりと背中から汗が噴き出し、全身の血液が顔に昇ってくるのを感じる。鏡を見なくても、自分が今どんな顔をしているのかたやすく想像がついた。
「わたしも」
無言で恥ずかしさに耐える続ける賢一郎の耳に、その声はふわりと届いた。
「わたしもお友だちになりたいです。その、ケンイチロウと」
ケンタウロスの少女は、はにかむように微笑った。
花がこぼれるような、やわらかな笑顔だった。
「あの、そっか。じゃあ……よろしく、クー」
「うん」
賢一郎がおずおずと差し出した手をクーはとる。細くてなめらかな感触と、普通よりもちょっと高めの体温が手のひらを伝わってくる。

ああこれ、惚れたな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4469t/

半人

2011年6月5日17時55分発行